

版画家 吹田 文明氏



人はみな、 才能という宝を もって生まれる

プロフィール

吹田 文明 (ふきた ふみあき) 氏
阿南市出身・東京都世田谷区在住・86歳

大正15年	那賀郡富岡町に生まれる
昭和22年	徳島師範学校 (現徳島大学) 卒・日和佐小学校勤務
昭和24年	東京美術学校 (現東京芸術大学) へ研修派遣
昭和25年	大田区立大森第四小学校教諭
昭和42年	サンパウロ・ビエンナーレ版画部門最優秀賞受賞
昭和44年	多摩美術大学に教授として招聘される
平成元年	紫綬褒章受章
平成6年	日本版画協会理事長就任
平成10年	勲四等旭日小綬章受章
平成16年	日本美術家連盟理事長就任
現在	日本版画協会名誉会員、多摩美術大学名誉教授ほか

吹田邸へ

東京都世田谷区。東京23区の南西部に位置し、阿南市の4分の1にも満たない面積(58平方キロメートル)に徳島県よりも多い人口(88万人)が密集する人口過密地域だ。しかし、吹田さんが暮らす地区は、世田谷の郊外にあり、また、インタビューは平日の午後2時ということもあって、最寄り駅の人の往来は想像していたほどでもない。駅から歩いて10分ほどで吹田邸に到着。「閑静な住宅地」を絵に描いたような場所である。周辺はゆつたりとした空気が漂っていたが、これからインタビューを行う者としては心中は穏やかではない。何しろ相手は初対面の名誉市民で、肩書は「世界的版画家」「前日本美術家連盟理事長」「多摩美術大学名誉教授」「紫綬褒章受章」「勲四等旭日小綬章受章者」である。

約束の時間が来たので、恐る恐る、しかし努めて平静を装い、玄関の扉を開けた。すると、満面の笑みを浮かべて「いやあ、遠いところをわざわざどうも。ご苦労様です。」と丁寧に挨拶をしてくださる優しい吹田さん。その瞬間に、極度の緊張から解放された気分になった。

前年にヘルニアの手術をしたとは思えないほどしつかりとした足取りで応接間に案内され、ソファに腰か

けると、しゃれた透明のガラススティーポットで、吹田さん自ら緑茶を入れてくれた。それから約2時間、吹田さんは終始優しい笑顔で、また時々いたずらっぽい少年のような笑顔でインタビューに答えてくださった。

幼少期 日和佐小学校勤務

—— 徳島師範学校(現徳島大学)に進むまでの14年間を生まれ故郷の富岡で過ごされたのですね。

「僕は正15年生まれで、当時の富岡は県南の文教都市という感じでした。静かな城下町だったんだけど、天神祭は大変なにぎわいだった。実家の近くに桑野川がありましてね、幼いころは素っ裸、小学校に入ってから『ネコフン』という黒い小さなふんどし姿でよく泳いでいました」
「父親は発明好きで、また映画好きでもあり、時々僕を連れて徳島市の映画館をハシゴしてくれました。僕は小さいころから手先が器用で、絵を描いたり物を作ったりするのが好きだったんだけど、今思えば、父親の影響を受けていたのかもしれないですね。僕らが小学校にあがる時から1年生の国語の教科書が『ハト・マメ』から『ススメ・ススメ・ヘイ・タイススメ』に変わりました。軍国教育に変わった時代です。小学校6年の時、町内から今の富岡小学校の

場所に移転したのです。6年生の私たちは、自分の机や椅子を運びました。中庭をみんなで掘って池をつくり、築山をつくって「一心庭」となげて卒業しました」

—— 終戦をはさんで徳島師範学校を卒業され、すぐに日和佐小学校勤務ですね。

「戦前は、国防と教育は国家の責任であると言って、師範学校などは全部無料でした。私は6年間、年350円の寄宿学生だったんです」
「師範学校を卒業してすぐに地方公務員として日和佐小学校の教員になりました。けれども僕は教員なんかしたくなかったんですね(笑)。だいたい絵描きになりたくて学校に行ってたんだから」

「牟岐線は1日3本くらいしか走ってなかったから、朝の6時ごろ家を出て風景の油絵を1枚描いてから、富岡駅の水道で顔を洗って汽車に乗るとい生活でしたが、よく学校を休みました。当時は代用教員が主で、師範学校出の教員が少なかった。僕の3つ上と4つ上はほとんどが戦死しました。2つ上が特攻に行く直前に終戦になった。戦後はそれまでと教育が180度変わってしまったんです。学校の先生に再度、民主主義教育をし直すような時代。先生方のやる気もあまりなかった。食べるものはないし、時々学校に行くぐらい

東京で版画と出会う

—— 東京美術学校(現東京芸術大学)で研修されていますね。

「日和佐小学校に勤務していた当時、県の教育長が見能林の井上正雄さんという立派な方で、たまたま私の小さいころを知っていたので、東京美術学校へ半年間の長期研究生として派遣してくれました。教育長さんには大変お世話になったと今でも感謝しています。また、そのころ私の兄が農林水産省に居て、国会議員をされていた紅露みつさんにいろいろお世話になったりもしましたよ。東京美術学校時代は、よく映画を見ました。学校で食べるはずの弁当を持って朝の10時から映画を見て、映画館の中で食べていました(笑)。

このころはまだ食糧事情が悪かってね、外で食べていると浮浪者が寄ってきて危険だったんです」

—— 破天荒な研修生ですね(笑)。

「そのころ、東京美術学校に羽ノ浦町出身の日下八光さんという日本画の教授がおりまして、日下さんにも随分とお世話になりました」

—— なぜ、版画家に?

「昭和25年に大田区立大森第四小学校教諭に任命されて、東京での小学校勤務がスタートしました。それから4、5年して、若手図工専科教員を集めて美術の研究を始めたんです。そのとき僕は品川区立御殿山小学校で絵だけを教えてただけで、第1回目の美術研究は版画にしよう、場所は吹田がいる御殿山小学校にしようということになったんです。昭和31年6月に全国版画教育研究発表会を御殿山小学校でやりましてね、その情熱が実って、第4回全国小・中学校版画コンクールで学校賞を受けたんです」

「僕は東京に出てモダンアート協会上に属して、モダンアート展で最初は油絵を出していたんだけど、昭和30年に棟方志功氏がサンパウロ・ビエンナーレで版画部門最高賞を取って、世の中の注目が版画に移っていったこともあって、だんだんと版画を出すようになりましたね」

「棟方氏が取ってから12年後、第9回サンパウロ・ビエンナーレ展でも私も版画部門の大賞をいただき、多摩美術大学に招聘されましたが、小学校の教師が一番楽しかったですね」



貴重なアトリエの一コマ。手前の機械が吹田式木版プレス機。

母校での記念講演会

—— 昨年11月の富岡小学校創立140周年記念式典に参加されました。「富岡小学校の山田先生という図工主任の方が、子どもたちに私の版画を見せて、子どもたちの感想文をたくさん送ってくれて、感激しました。私も小学校に22年間勤めていましたからね。稲村校長先生からも是非にということでお誘いを受けましたので、私の作品を寄贈し、子どもたちに話をさせてもらいました」

「人はみな才能という宝をもって生まれてきます。小学校1、2年生でははっきりしませんが、3、4年生になると自分は何が得意で、何が

現在の活動状況

—— 今も創作活動をされているのですか？

「今も作品を作り続けていますよ。モダンアート協会展が4月に、版画協会展が10月にあり、それぞれ1点ずつ出品しています。前は2点ずつ出してたんですけどね」

「そのほかに、多摩美術大学で年に3回、学生の作品を批評しています。それと、理事を務める日本美術家連盟で月1回の会合もあるし、まだ決定していないけども少し大きな仕事も引き受けなあかんかもしれない。結構忙しいですよ、この年になっても」

「私の版画の作風が抽象から具象へと変わってきました。80歳までは理論的造形作品。80歳を過ぎてからは自分の好きなものを作っています。良く『字は人なり』と言われるが、『絵は人なり』ですね」

最後に

—— 市民の皆さんにメッセージをお願いします。

「ふるさとから手厚くお心遣いを頂き、うれしく思っています。子どもの頃から絵を描くのが好きで、そんなことばかりして、阿南の皆さまからお世話になり続けている私が選ばれて大変恐縮しておりますが、同時に素晴らしい感動しております。今後、阿南市のためにできることがあればお手伝いしたいと思っています」

5月1日、阿南市制施行55周年記念式典で、吹田文明さんに阿南市名誉市民証を贈呈します。会場には、吹田さんの作品も展示されます。

これまでの名誉市民

平成11年12月20日決定
日亜化学工業株式会社創業者
小川 信雄氏
明治45年7月9日生(享年90歳)

徳島高等工業学校応用化学科製薬化学部卒業。昭和23年、協同医薬研究所を創設。昭和31年、日亜化学工業株式会社に改組し、社長に就任。蛍光灯、ブラウン管をはじめ、LED、半導体レーザーなどに事業拡大し、世界的に著名な企業に成長させた。40有余年の長きにわたり、地域産業の発展と地元企業として雇用の場の創出に卓越した手腕を発揮した。昭和19年に勲四等瑞宝章、平成11年に徳島県民賞を受賞。

昭和61年7月24日決定
初代阿南市長
澤田 紋氏
明治45年4月14日生(享年74歳)

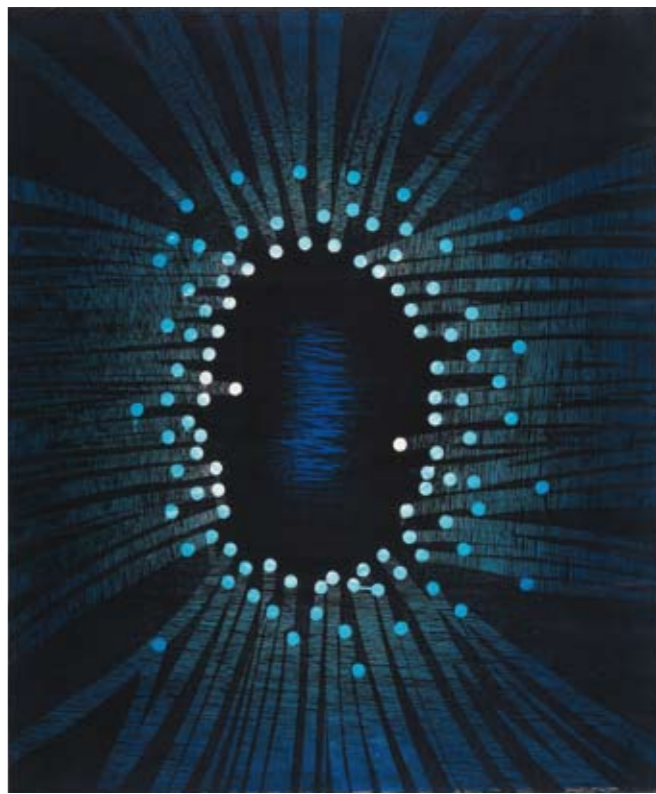
那賀郡富岡町長を2期務め、昭和33年5月、阿南市発足により初代市長に就任。以後3期12年間にわたって市の基盤づくりに献身した。神崎製紙、国立工業高等専門学校の誘致や、各産業の振興に努め、阿南市発展に偉大な足跡を残した。市長退任後も、社会福祉協議会会長、阿南信用金庫理事長等の要職を歴任。長年にわたる地方自治功勞が認められ、昭和47年10月に藍綬褒章、昭和57年4月に勲四等旭日小綬章を受章。

昭和43年10月12日決定
日本初の女性国会議員
紅露 みつ氏
明治26年5月10日生(享年87歳)

群馬県碓氷郡に生まれる。桑野村生まれの元代議士、紅露昭氏と結婚。昭和21年に戦後初の総選挙に出馬、当選し、衆議院議員として政界デビューした。翌年参議院議員に鞍替えし、以後連続4期にわたり参議院議員を務めた。この間、参院在外同胞引揚特別委員長(婦人としては両院通じて初の委員長)、第二次鳩山内閣の厚生政務次官など多数多くの要職を歴任、これらの功績により、昭和40年4月、勲二等宝冠章を受章。



青の世界(B) 1974年
※1975年 マイアミ・グラフィック・ビエンナーレ三等賞



青い十字 1965年
※1967年 第9回サンパウロ・ビエンナーレ版画部門最優秀賞



雨に散りし友に捧ぐII (戦後50年の鎮魂詩) 1995年

徳島県立近代美術館蔵



白鳥座 1997年

喜びの声

このたびは吹田文明先生が名誉市民に選定されましたこと、心からお慶び申し上げます。先生には地元のゆかりということで県立近代美術館にも多大なご支援をいただいております。2006年に世田谷美術館との共催により個展を開催させていただきました。そのご縁もあって、なにかにつけ若輩の私に励ましの声をかけてくださいます。それはきつと歩みを見守ってくれる存在の大切さを先生ご自身が故郷を離れ、ずっと思っただけでなかったからではないかという気持ちです。これを機に、吹田先生と故郷を担う人たちのつながりが一層、互いの心を力強く結ぶものになっていくことを願っています。朗報お聞きうれしいことでした。

徳島県立近代美術館
上席学芸員
竹内 利夫さん